あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第98回

DevFest東北 2019 in 郡山!

●Hack For Japan
清水 俊之介（しみず しゅんのすけ）

2019年11月に行われた「DevFest 東北 2019 in 郡山（以下、DevFest東北）」。GDG Fukushimaのオーガナイザーであり、自称「Hack For Japanの親愛なる隣人」こと清水がHack For Japanの視点からDevFest東北をレポートします！

2019年11月17日、福島県郡山市にて東北すべてのGDG（Google Developer Group）[注1]により共催されたDevFest東北。参加者は東北のGDGでは初となる100名を超え、「Diversity & Inclusion」をテーマにさまざまなセッションが行われました（**写真1**）。

「親愛なる隣人」より愛を込めて

さて、レポートする前に筆者とHack For Japan（以下、H4J）の出会いについて話したいと思います。なぜなら、H4Jなくして今回のDevFest東北は存在しなかったからです。某アメコミの「親愛なる隣人」のようにH4Jというヒーローのファンだった第三者的視点から、H4Jの活動の意義と価値を、DevFest東北に至る物語とともにお伝えします。

筆者がスタッフに加入したのは2014年、H4Jの活動は東日本大震災発生直後から行われているので、それから3年半が経過したころのことでした。

もともと筆者は絵画の修復を志しており、2011年はまだ東京の郊外で専門分野である修復化学の講師をしたり版画や古文書を修理したりと、おそらく読者の方には馴染みないであろう仕事をしていました。小さいころから好きだったプログラミングやデザインの仕事をたまに受けるという生活をしながら。

そんなとき、東日本大震災が発生します。

ひとりでできることの限界

2011年3月当時、原発事故に関する情報が錯綜していました。そこで筆者は自分にできることで貢献しようと「RADIATIONDOSE」という空間放射線量と積算量、原子炉のデータが可視化されたサイトを立ち上げます。専門家にアドバイスを受けながらも、化学とデザインの知識を組み合わせて人々に貢献しようという想いでした。

情報を求める人がいる一方、数ヵ月が経過すると仕事との両立、作業の負担、そしてモチベーションの維持に限界を感じ始めていました。そんな時期に、同じような想いで震災の復興を支援しているあるプロジェクトのニュースを目にします。彼らはそれぞれが連携し、その想いを被災地の内外から届け

注1　GDG Fukushima、GDG Cloud Fukushima、GDG Ishinomaki、GDG Cloud Sendaiの4グループ。

▼写真1　さまざまなカテゴリーの人が集ったDevFest 東北 2019 in 郡山

続けていました。そう、筆者のヒーローであり続ける「Hack For Japan」のみなさんのことです。

かっこいい。その一言。

ただ修復を細々とやっていた当時の自分には、とても遠い存在のように思えました。誰もが知っているような企業の名前が並び、想像したこともない世界に生きるヒーローたちの話。きっと自分とは無関係だと、そっと憧れに蓋(ふた)をしました。

つながる想いと想い

自分とは関係ないと感じながらも、そのニュースを見て以降、次々と生み出されていくアプリやハッカソン[注2]などは気になって追い続けていました。

そしてあるとき、RADIATIONDOSEをネットアクション[注3]の企画で取材していただくことがあり、その企画の中で偶然にもH4Jのメンバーも取材を受けていることを知らされます(**写真2**)。

まさか自分がヒーローたちとニアミスするとは!

この人たち、ほんとに生きてるんだ! 思いがけぬ接点に舞い上がって憧ればかりを語る筆者を「それはあなたの悪いところだよ」と諭してくれた方がいました。それはそのときインタビュアーを務められていた杉山幹夫さん。ヒーローたちも困っている人のためにコードを書いている同じ想いを持った人間だと教えてくれた、物語の流れを大きく変えることにもなった言葉を今でも思い出さない日はありません。

しばらくして、H4Jが開催に大きく関わった第1回目の「IT×災害会議」[注4]に筆者も参加することになりました。そこでさまざまな問題に向かって取り組んでいる仲間たちや、ニュースを通して知っていた及川卓也さん(@takoratta)らH4Jのメンバーと出会います。

こうして修復家の端くれだった青年は、奇跡的にヒーローたちとともに活動していく第一歩を踏み出すことができました。

注2　本誌2011年12月号、連載第2回で紹介。過去の連載は次のURLで見られます。**https://hack4.jp/articles/sd**
注3　経済産業省をはじめとした各省による、震災へのITやインターネットを通じた支援活動を推進するプロジェクト。
注4　本誌2014年2～3月号、連載第26～27回で紹介。

Diversity & Inclusion

さて、長くなった昔話はこれくらいにして、今回のDevFest東北について話を戻しましょう。まずイベントは日本IBMでWatsonの開発に携わる村上明子さんの基調講演で幕を開けます。GDGはおもにGoogleに関連したテクノロジを扱うコミュニティですが、今年のDevFestの全世界共通テーマは「Diversity & Inclusion」。東北の地でこのテーマについて話してほしい人として、真っ先に村上さんが思い浮かびました。

村上さんとは石巻ハッカソンや「第2回 IT×災害会議」[注5]といったH4Jの活動で出会い「防災・減災ハッカソン」[注6]では同じチームで開発したご縁から、今回のちょっと変わったオファーを快諾していただきました。村上さんは会議をきっかけに誕生した団体「IT DART」[注7]の代表理事としても活動されています。ちなみにハッカソンは、関さん(@hal_sk)が代表を務めるCode for Japanの最初のサミットの併設イベントでもありました。

研究者であり、エンジニアであり、そして女性であるという業界としてはマイノリティな存在としてシステム開発の現場に携わってきた村上さんならではの視点から語られる基調講演は、DevFest東北がなぜ多様性をテーマにしているのかをすべて説明し

注5　本誌2015年1月号、連載第37回で紹介。
注6　本誌2015年2月号、連載第38回で紹介。
注7　本誌2015年7月号、連載第43回で紹介。

▼**写真2　ネットアクションに掲載された及川さんと冨樫さんの記事**

Hack For Japan　及川さん、冨樫さん対談(1/4)

てくれているかのようでした（**写真3**）。

講演の中で最も印象に残ったのが「アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）」という言葉。たとえば育児をする人を指して「ママ」と表現するとか「今の若者は……」というような、ふと誰もが使ってしまうような言葉もその1つです。村上さんは「女性だから物理なんて勉強しなくていい」と言われた過去を振り返り、そのような偏見が可能性を制限してしまうと危惧します。「未来を作っていくのは『エンジニア』、だからこそ一人一人が責任を持って考えるべき」と教えてくれました。

機械学習を楽しもう！

午後からは内容がガラッと変わり「AIによる自動運転車」のセッションです。登壇したのはH4Jのメンバーの中でも同じ福島で活躍する佐々木陽さん（@gclue_akira）。佐々木さんは「Hack for Town in Aizu」[注8]などさまざまな活動をしている、この地に欠かせないヒーローです。セッションではTensorFlowをベースとした自動運転のプラットフォームである「Donkey Car」についても話してくれました。

「機械学習を学びたいがデータがなくサンプルを動かすだけで終わってしまうことが多い」と言う佐々木さん。セッション中に学習をさせていた車体のデモには、多くの参加者が釘付（くぎづ）けになりました（**写真4**）。Donkey Carのように楽しみながら続けられるものは、機械学習という技術の裾野を広げていくうえで重要だということを感じました。

注8　本誌2014年5月号、連載第29回、本誌2015年6月号、連載第42回で紹介。

▼**写真3　基調講演は専門的な技術から、多様性まで幅広く**

次世代のヒーローたち

「New Hero Session」では、性別はもちろん国籍や世代も多様な新時代のヒーローたちが登場します。

ミャンマー出身のYu Yu Moe Myintさんはミャンマーにある日本のオフショア企業で働き、2019年に日本にやってきたばかりのエンジニア。「技術ができれば日本語は学ばなくてもいい」と感じていたYu Yuさんは、日本のエンジニアとのプロジェクトに関わる内に興味が湧き、自然と「日本語を学んで日本で働きたい」と思うまでになったといいます。実はそのプロジェクトというのが、直前のセッション「GCPで動く企業の初動対応システム」の内容そのものだったのはここだけの話。2年前に学び始めた日本語で堂々たるスピーチを披露してくれました。

続いては今回のDevFest東北最年少スピーカーとなった門馬響さんが登壇。なんと中学1年生だそうです。門馬さんは地元・南相馬市でプログラミングを学んだ成果を紹介してくれました。ちなみに門馬さんのメンターを務めたのは「南相馬小高ハッカソン」[注9]を主催した森山貴士さん。H4Jの活動の中で生まれた縁が、新たな世代に受け継がれてその姿を見せてくれました。

最後はイトナブより千葉沙織さんのセッション。千葉さんが担当する「月刊イトナブ塾」という、本誌2019年11月号でも触れたプログラミング教室で小学生が作ったゲームを披露してくれました。

その流れを引き継ぐように、セッションはイトナ

注9　本誌2016年6月号、連載第54回で紹介。

▼**写真4　掲げられたリアルタイムで学習中の車体**

ブ代表の古山隆幸さんによる「ナブカツLab」[注10]の紹介へと移ります。「昔は生きるための知恵を子供に伝えるのが当たり前だった。今の大人たちがそれをしないのはなぜ？」という問いかけから始まり、古山さんは「地域のIT教育格差を是正していくためにも大人が挑戦している背中を見せることが大事」と語りました。郡山でエンジニアの育成にチャレンジするイトナブの今後に注目ですね！

ARのパイオニアによるARCoreの最新情報

前日に石巻で行われた東北TECH道場[注11]を終えたその足で駆けつけてくれたのは、第1回で筆を執ってから8年ほど本連載をリードしつづけている高橋憲一さん（@ken1_taka）。話題は「ARCore」の最新情報についてでした。

セカイカメラ[注12]の開発の裏話を交えた高橋さんならではの導入のお陰で、「エンジニアでなくても自然とARの世界をイメージしやすかった」との声を多数いただいたこのセッションでは、現実の光に近い光源の見え方を再現する「Light Estimation」機能の新モード「環境HDR」について解説されました。

これまでは、3D空間上に配置したオブジェクトには実世界の光の「明暗」のみが反映されていましたが、今年発表された新機能の環境HDRでは光源の「方向」も反映できるようになりました。本物と見分けがつかないようなオブジェクトのデモに、多くの参加者が驚きとともに見入っていました。

偏ればどちらか、中立ならすべて

イベントの終わりを告げるクロージングでは、GCPUG仙台を立ち上げ、筆者とGDG Fukushimaのオーガナイザーを務めている相棒、中園良慶によるスピーチで幕が下ろされました。

中園はクロージングの中で「清水（筆者）がダイバーシティとかよくわからないことを言い始めたと思ったが、今日のイベントでいかにそれが重要か理解した」という話をしましたが、実は当の本人も同じ感想を抱いていました。2017年のSotM（State of the Map）[注13]で聞いた「No Diversity, No Community」という言葉の魅力に惹(ひ)かれつつも、よく理解しないままこの2年間活動を行ってきましたが、DevFest東北に参加してくれた方々を見てようやく腑(ふ)に落ちたのです。偏れば「どちらか」しかないけれど、中立になると「すべて」になる。そんな貴重な体験ができた気がしています。

No Hack For Japan, No DevFest 東北

今回のDevFest東北は、H4Jが作ってくれた縁に引き寄せられるように各所からスピーカーが駆けつけてくれました。

筆者は現在、小泉勝志郎さん（@koi_zoom1）が開催した「島ソン！」[注14]で中園と出会い、同じ島ソンの参加者だった盟友・浅井渉と3人でdottという会社を経営しています。及川さんから誘われるがままに塩釜(しおがま)市へ向かい、島ソンが開催される離島に向かう船で佐伯幸治さん（@widesilverz）からH4Jの話を聞いているときには想像すらできない未来。GDG石巻の津田恭平さんとの出会いもまさにそのときで、GDG Fukushimaに貴重な多様性をもたらしてくれる清水万里子をオーガナイザーとして迎え入れられたのも、鎌田さん(@4niruddha)がサポートするイベントで知り合ったことがきっかけです。そして、休眠していたGCPUG仙台をGDG Cloud Sendaiとして再生させ盛り上げているSaiさんと山田健仁さんも合流して東北の全GDGが集結しました。

思えば、あのときヒーローたちが声を上げていなければきっと存在すらしなかったイベントだったと思います。さまざまな形で携わってきたHack For Japanの面々への感謝とともに、このレポートを終えたいと思います。SD

注10 開催地である郡山市との、地域のIT人材不足の解消を目的としたプロジェクト。
注11 2016年1月号、連載第49回で紹介。
注12 高橋さんも開発メンバーだった、初期のスマホでARを実現したアプリ。
注13 OpenStreetMapが世界各地で開催するカンファレンス、2017年は会津若松市で開催。本誌2018年2月号、連載第74回で紹介。
注14 本誌2014年8月号、連載第32回で紹介。